
夏祭り～一年後の約束～

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り～一年後の約束～

【Zコード】

Z7510A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

頼は、一年ぶりに祖父母の住む田舎を訪れる。一年前、田舎の小さな駅で偶然出会った少女、巡。頼は、ずっと巡と再会出来ることを待ち望んでいた。巡と過ごす田舎の夏休み。楽しい日々。浴衣を着て、夏祭りにも出かける。一人で打ち上げ花火を見ながら、巡はある決心を頼に打ち明ける…

(前書き)

「夏」をテーマにした共同企画小説です。「夏小説」と検索すると、他の先生方の作品も一覧になります。ぜひ、読んでみて下さいね！

月日は流れ、あの日から一年が経った。

頼は一両編成の電車の窓から、ゆっくりと流れる風景をぼんやりと眺めていた。祖父母の住んでいた田舎が近づくにつれ、田園や畑が続く殺風景な景色が続いてくる。

巡待つてくれるかな？ 何も連絡してなかつたし無理か……。
俺のこと、もう忘れてるかもしねないよなあ……。

頼は軽く息を吐く。約一年前、駅で出会った少女、巡。浴衣姿でじっと佇んでいた巡の姿が、昨日のことのようになに鮮明に思い出される。

あれから一年。

中学三年生だった頼は、二学期から猛勉強し見事希望校に合格した。真っ先に巡に報告したかつたが、彼女への連絡方法はなかつた。巡は合格したのかな？……。

受験に失敗して一浪していた巡。もし、再会出来たとしても、巡が不合格だつたら氣まずい。恨みっこ無しだぜ！ と言つては見たものの、自分が不合格するより嫌な気分になる。

開けた窓から夏の風が吹き抜け、ミンミンゼミの声が聞こえてくる。巡と会った一年前の八月の終わりは、ツクツクホウシが鳴っていた。今はまだ七月。夏休みは始まつたばかり。セミの鳴き声も元気良く、楽しそうにさえ聞こえてくる。

車内にアナウンスが流れ、電車は無人の小さな駅を目指し、速度を落としていく。緩いカーブを曲がれば、到着だ。頼は鞄を手に取り、席を立つた。

巡、来てないな……。

小さなプラットホームがあるだけの無人の駅には、誰もいなかつ

た。

だよな……巡にこの時間に到着するなんて言つてなかつたし。

そう思つてはみるものの、頬は少しガツカリした。本当は今年の春訪れるつもりだったが、行く間際になつて風邪をひき体調を崩してしまつた。這つても行きたい気持ちを抑え、頬は涙を呑んで断念したのだ。高校受験を頑張れたのも、巡との約束のお陰だ。巡にもう一度会いたい、この一年間、頬はずつと願つていた。

電車が駅に到着し、ドアがスッと開く。頬は一年ぶりに訪れたホームに降り立つた。時刻は正午前。真夏の日差しが眩しい。近くの山から、うるさいくらいのミンミンゼミの鳴き声が聞こえてくる。ゅつくつと走り去つて行く電車を見送つていると、カタカタとう音が頬の耳に響いてきた。誰かがホームへの階段をを上がつてくる。

「あつ……」

振り向いた頬の目に、浴衣姿の少女が映つた。一年前と同じ藍色の花柄の浴衣、赤い帯、赤い鼻緒の下駄。一つだけ違つたのは、お下げ髪が下ろされて少し短くなつていたこと。巡は、はにかんだ笑顔を頬に向ける。

「な、なんか、一年前にタイムスリップしたみたいだな」

頬は巡の姿を見つめながら、頭をかく。巡の姿がやけに眩しい。それは、真夏の太陽のせいかかりではなく、弾けるような巡の笑顔がに眩しかつたから……。巡は、一年前と比べて生き生きとしている。青白かつた肌も、健康的に程良くなっていた。

「頬が私のこと分からぬいかと思つて、同じ格好で來たの」
巡はフフッと笑う。

「な、ことないだろ。あ、でも、よく分かつたよな、今日俺が来るつて」

「頬のお祖父ちゃんに聞いたの。飯井さんつてこのこの町じや軒しかないから」

「あ、そつか。珍しい名字つてのもたまには役に立つな」

頬は照れながら笑う。巡が祖父母の家を探して来てくれたことが、何となく嬉しい。

「じゃ、行こうか」

「頬……」

歩きかけた頬に、巡が声をかける。

「え？」

「まだ聞いてないよ、高校受験の結果」

「あっ、そうだな……」

頬は立ち止まって巡と向き合つ。巡も当然合格したものだと想つていた頬だが、ふと不安になる。

「同時に言おうか。か×で手で示して

「あ、ああ」

上田遣いに見上げる巡の真剣な眼差しに、頬はドキドキしてくる。もし、巡の手が×になっていたら……。

「せーのー！」

頬は目を瞑つたまま、勢いよく手で の形を作った。

「……」

恐る恐る薄めを開けてみる。巡がクスクス笑いながら、頬を見つめていた。巡の両手は高く上がり大きな を作つていた。浴衣の袖が風でヒラヒラして、袖から覗く巡の腕が、どことなく色っぽかった。

「頬つて結構恐がり？」

ぼんやりしている頬に、巡は悪戯っぽい笑みを浮かべて聞く。

「な、なことなこと。ちょっと巡のこと心配してやつただけだ」

頬は慌てて鞄を持つと、平静を装いつつ先を歩いて行く。

「頬、私知つてたよ」

「は？」

「高校に合格したこと、頬のお祖父ちゃんに聞いたから振り向いた頬に、淡々と告げる。

「……」

巡は笑いながら、ホームの階段を下りていく。

「あ、ちょっと！」

一つ年上の巡に振り回されつつも、頬は巡も合格していたことこのホツと安心した。

「あのさ、それと」

頬は一段飛ばしで階段を駆け下り、巡より先に下りた。

「何？」

カタカタと下駄を鳴らし、巡が下りて来る。

「もう、やめたんだよな？……その、『死ぬ』の。再会したからまた『死ぬ』なんて、冗談きついからな」

並んだ巡の横顔を、頬はチラリと見る。巡は真っ直ぐ前を向いたまま、口元に薄く笑みを浮かべていた。

「……やめたよ」

巡はポソリと言った。

「死ぬことに興味なくなっちゃった」

その言葉を聞いて、頬は飛び上がりたいほど嬉しかったのだが、何気ない風を装つた。

「そつか、だよな。せつかく高校合格したのに、今更死ぬなんて

」

巡は頬の方を見ずに、そのまま駅を出て歩いて行く。

「あ、ちょっと、ちょっと、どこ行くんだよ」

「頬のお祖父ちゃんとお祖母ちゃんの家、でしょ？」

巡は立ち止まり、頬を見て微笑んだ。

「ま、ただけど……」

「頬を連れて帰ってくれって頬まれたから」

巡はまた先に歩き出す。

「そりや、どうも……巡、浴衣なのに歩くの早」

頬は鞄を抱え、急ぎ足で巡を追いかける。

「お祖母ちゃんが、そうめん作つて待つてるつて」

「ホントか！ ばあちゃんのそーめん、すっげえ上手いんだ。巡も

食つていけよ。腹減つたなあ」

田舎のじいちゃんとばあちゃん。山盛りのたらいそーめんのこと
を思い浮かべると、頬は急に元気になってきた。夏休みは始まつた
ばかり。巡と過ごすこれから夏のことを思うと、心が浮き立つて
くる。

二人の頭上には、ジリジリと照りつける真夏の太陽。ミンミンゼ
ミの鳴き声が、さつきより大きくなってきたようだ。頬と巡は二人
並んで田舎道を歩いて行つた。

夏の山と川と海。今年も頬は田舎の夏休みを満喫していた。ただ、
いつもと違うのは、巡と一緒にすること。子供の頃から一人で野山を駆
けめぐり、遊ぶことが大好きだったが、今年は巡と一緒に一人だ。自然の
中で一人はしゃぐ気軽さはないが、一人で共有出来る時間は特別だ。
巡の家は、祖父母の家から自転車で十五分くらいの所に位置して
いた。巡は毎日のように自転車に乗つて頬の元にやって来る。普段
の巡は、Tシャツにジーンズというラフな格好だ。浴衣姿しか知ら
なかつた頬には、そんな巡が新鮮だつた。

その日も巡は、大きめの麦わら帽子を被つて自転車を漕ぎ、朝か
ら頬の元にやつて來た。

「たまには俺が巡の家に行くよ」

遅い目覚めで、まだ寝癖のついた髪をいじりながら、欠伸混じり
に頬は言う。

「いいの。ここの方が家より落ち着くから」

すっかり飯井家に打ち解け、自分の家のように祖父母の家に馴染
んでいる巡。祖父母も孫娘のように巡を可愛がつていた。

縁側から涼しい風が吹いてくる。南部風鈴が風に揺れて、チリン
チリンと小さく鳴る。頬と巡は縁側に座り、祖父母が畑で作つた
取れたての真つ赤なスイカにかぶりついていた。一人で過ごすと言

つても、特に何をする訳でもない。野山に出ても、巡はぼーと佇んでいることが多かった。元もと口数が少なく活発ではない巡だが、頬は側に巡がいるだけで、心が満たされ安らいだ。

静かにゆっくりと流れしていく時間。いつの間にか、頬はそう言つ時間が好きになっていた。

「じいちゃんのスイカは上手いや

頬は最後の一口にかぶりつき、口をモグモグさせて縁側に種を飛ばす。

「頬、学校楽しい？」

黙々とスイカを食べていた巡が、ふと口を開く。

「は？」

頬は食べきったスイカをポイと庭に投げる。

「まあまあかな……授業についてくのがやつとつてと……」

頬はそう言って、縁側に「ゴロン」と横になる。

「そう、私もまあまあ。私の場合は学校に通えるってだけでも家族には喜ばれてるから」

巡はフフッと弱く笑う。

「成績のことなんて何も言われないよ」

「へえー！ いいな、それ。俺なんかいつも親にこう言われるもんなんだ。もっと勉強しろって耳にタコができるくらい言われてんな

「ふーん、でも、それって期待される訳だよね」

巡はハつ切りのスイカをお盆の上に置く。

「頬、私ね……」

「うん？」

寝ころんでいた頬は、巡の方に顔を向ける。

「あつ、もつたいねえな。赤いとこまだたくさん残ってるぜ」

巡が食べていたお盆のスイカを見て頬は言つ。

「頬にあげるよ」

巡はクスリと笑う。

「……や、ちょっとそれは で、何？」

頬は半分身を起こす。

「あ

巡は言いかけた言葉をいつたん飲み込むと、頬に笑顔を向ける。

「もうすぐ夏祭りだね」

「ああ、神社の夏祭りか。そうだな、田舎だから規模小さいけど、一応打ち上げ花火もあがるんだよな」

「あの浴衣着て来るから、頬も浴衣着てね」

「浴衣？ 僕浴衣なんて持つてたつけ……」

頬はちちちやな頃に両親に着せられて依頬、浴衣を着た記憶がない。

「頬、きっとよく似合ひと思つよ」

「そうかな？ 後でばあちゃんに聞いてみよ。俺もさあ、初めてなんだよ。女の子と一人で夏祭りに行くのって」

「本当に？ 彼女とかいないの？」

「いねえや」

頬は巡と顔を見合わせ、ほんのりと頬を染める。

「ふうん、意外」

「どういう意味だよ？」

「頬つて軽そだから、彼女なんて何人もいるのかと思つた」

「いねえよ、一人も……」

「一人も？……」

ふと二人は顔を見つめ合い、沈黙する。さわさわッと庭の草木を揺らす風。風鈴の涼しい音色。巡の顔を間近で見つめ、頬の鼓動は高まる。

「あの

巡の瞳の奥を見つめながら、頬はゴクンと唾を飲み込む。と、その時、ドタドタと廊下を歩いてくる足音がした。

「頬！ 巡ちゃん！ スイカまだいるかー？」

頬のばあちゃんの、間延びした大きな声がする。頬はその声にホツとすると同時に、雰囲気がぶち壊れ、少しだけガツカリする。後

少しで、巡に告白してしまいそうな勢いだった。

「一人だけ、いるのかな?……。

心の中でそう思いつつ、頬はばあちゃんの方へ声を返した。

「ばあちゃん、もつと持つて来て!」

神社の夏祭りの日。

小さな町はいつもの数倍の人々で賑わう。神社へと続く道筋には、様々な出店が出て祭の雰囲気を醸し出している。真夏の太陽は沈み、暗くなり始めた空にはチラホラ星が出始めていた。

「やっぱり、頬、浴衣よく似合つてるね

巡は浴衣姿の頬を見て微笑む。

「そつかなあ?……」

頬は自分の浴衣に目を落とす。

「これ、昔父ちゃんが着てたやつだぜ。ばあちゃんがタンスから引つ張り出してきて手直ししたんだ」

「似合つてるよ」

「俺、浴衣も下駄もはき慣れてないから、窮屈だな」

巡はうちわで軽く顔を仰ぐ。彼女は、いつもの浴衣だ。今夜は髪をアップにして、花模様の髪飾りでとめている。いつもより大人っぽく見えて、うなじの後れ毛は頬の胸をドキドキさせた。

「そのうち慣れるよ、行こう」

「あ、う、うん」

ついつい巡の浴衣姿に見とれていた頬は、慌てて巡から視線を外す。近くの神社で、祭りの開始を告げる花火がパンパンと鳴った。

頬と巡は神社へ向かう人々に混じり、下駄を鳴らしながら一人並んで歩いて行つた。

「あ……また破けちゃつた……」

出店の金魚すくいにチャレンジしていした巡は、二回目のすくい網も早々と破つてしまつた。

「巡、下手だな。金魚すくう前に破つてるじやんか」

「だつて、金魚すくいなんて初めてだもん……」

巡は少しむくれる。

「俺のをよく見てろ。得意なんだぜ」

頬はさつそく網を買って試してみる。頬は手慣れた手つきで、金魚を追い込み、次々とすくつしていく。

「スゴイね、頬」

他の見物人も感嘆の声を漏らすほど、頬は金魚すくいが上手かつた。最後、同時に二匹すくい取つた所で、網が破けた。赤五四、黒三匹の金魚を袋に入れて貰つた頬は、得意げに立ち上がる。

「ちつちやい頃から金魚すくいには自信があるんだ。もうやめてくれつて、店のオヤジに頬まれたことだってあるんだぜ」

頬は金魚の袋を巡に手渡す。

「一種の才能だね」

巡は金魚を提げて、クスリと笑う。浴衣にうちわに金魚。巡の姿は夏祭りの雰囲気にマッチして、頬はまた見とれてしまつ。「もうすぐ、花火が上がるね」

「え？ あ、そうだな」

「神社に上がらうよ」

「ああ、俺、花火がよく見える良い場所知つてんだ」

二人は、神社へと続く出店が並ぶ道を進み、鳥居をくぐつて急な石段の前まで来る。

「うちわ、持つてやるよ」

両手にうちわと金魚を持つ巡に頬が言つ。

「ありがと」

頬は巡からうちわを受け取り、石段を一段上る。巡が石段を上りうとした時、頬はスッと手を差した。巡は頬を見上げる。

「なんか……巡、転びそうで危なつかしいや」

「それは、頼の方じやないの？ 下駄はき慣れてないみたいだし」

巡はそう言いつつ、差し出された頼の手を握り石段を上がる。握つた巡の手が温かく柔らかく、一瞬頼はドキッとする。

「あつ」

その拍子に軽くバランスを崩しそうになる。

「ほら、しつかりしてよ」

「チエ、巡が力入れすぎるからだよ」

二人は顔を見合わせて微笑む。

「結構長いんだから、転ぶなよな」

「頼がでしょ。頼が転んだら、私手を放すから」

「何だよ、冷てえな。絶対放してやんない。下まで道連れだ」

頼と巡はしつかりと手を繋ぎ、急な石段を上つて行つた。

長い石段を上りきつた所で、打ち上げ花火が上がり始めた。神社の真上に大きな花火の花が咲き、ドーンという大きな音が空に響き渡る。打ち上げられる花火の数は少ないが、間近で見る花火は見事だつた。

「こっち、こっち、もつと良い場所があるんだ」

頼は、頭上を見上げていた巡の手を引っ張る。神社付近で見物している人々の間をぬつて、頼は神社の裏手にまわる。裏山を少し奥に入った所に、視界が開けた場所があつた。遮る木々もなく、真上には大空が広がっている。

「こんな場所あつたんだ。頼は私よりよく知ってるんだね」

巡は素直に感心する。

「任せとけよ。俺、ガキの頃からこの町は探検しつくしてるからな。地元の人間より知ってるかも」

「あ、花火」

ヒュルヒュルという音とともに光が走り、大空一面にパツと花火が広がる。

「綺麗ね」

「ああ」

二人は空を見上げ、しばし打ち上げ花火に見入る。
他には誰もいない。 大空を独占して一人のためだけに上がつているかのような、花火。 今、この世界には巡と一人きり。 鮮やかな花火を見つめながら、頬は心をときめかせる。 繋いだ巡の手が少し汗ばんで、さつきより熱く感じられる。

高鳴る鼓動。 頬には初めての感情だった。

「……」

頬は花火から巡に視線を移す。 上を見上げ無心で花火に見入る巡。 花火の光を浴びて輝いているようだ。 お世辞でもなんでもなく、巡は花火より綺麗だと頬は思つた。 それより、心臓がドキドキして、頬には花火など目に入つてこなかつた。

「巡、俺」

思わず、握つた手に力が入る。

「ちょっと、痛い」

巡は、頬の手を振りほどく。

「あ……ごめん」

頬は俯ぐ。 それと同時にカーッと顔が熱くなつた。 きっと顔が真っ赤になつてているだろう。 頬は夜の暗さをありがたく思つた。

「頬、私ね……」

しばらくして、巡が口を開く。

「な、何？」

巡はまた空を見上げ、花火を見つめる。 大きな垂れ花火の花が咲き。 ドーンという低い音が木靈する。

「私、九月からイギリスに留学する」

垂れ花火の最後の光が消えた時、巡は意を決したように一気に告げた。

「え？」

突然の言葉に、頬は驚く。

「私ね、今までこの小さな町から出たことないの」「だからって、いきなりイギリスかよ？」

「交換留学の話があったから、一年間向こうで過ごしてみようかと思つたのよ」

「一年間も？……」

「やつぱり、私には無理だと想つ？……」

「巡は頼の方を向き、不安げに尋ねる。

「いや、巡なら大丈夫だよ。ただ」

頼は巡の視線を避けるように、下を向く。

「ただ？」

「その、一年も巡に会えないのは寂しいかなと……」

自分で言つた言葉に頼は一層赤くなる。巡はクスッと笑つた。

「一年なんてアツという間でしょ？ 頼とこの前会つたの一年前だもん。今から一年後だって直ぐだよ」

「違う！」

頼は顔を上げ巡を見つめる。思わず語気が強くなる。

「え？……」

「全然違う。一年前と今じゃ巡との親しさが全然違う。その――」

言葉の途中で打ち上げ花火が上がり、その光が二人の姿を照らす。

「俺、俺、巡のこと好きだし……」

「私も頼のこと好きだよ」

やつとの思いで『好き』と言つた頼だが、淡々とその言葉を繰り返す巡に、少しばかりカチンとくる。

「そんな軽く言つなよ。俺は真剣なのに」

「真剣？……」

「……」

高鳴る鼓動を抑え、頼は巡の肩にそっと手をかける。

「……真剣に『好き』」

頼は、ようやくそれだけ言つ。早鐘のような心臓の音が、巡にも聞こえるんじやないかとさえ思つ。

「……」

意を決し、頬はゆっくりと巡に顔を近づける。真っ直ぐ頬の瞳を見つめていた巡は、そっと目を瞑った。打ち上げ花火が終わりの時間を迎える、最後に次々と花火が上がり始める。花火の明かりが揺れる中、頬はそっと巡の唇にキスした。ドーン、ドーンと木霊する花火の音。

「……」

ゆっくりと頬の唇が離れる。頬は頬を染め、視線を落とした。キスした後どんなリアクションをすればいいのか？ 何て言えばいいのか？ 頬は全く分からなかつた。いつものように軽く笑つてかわすことなんて出来ない。突つ立つたままの頬を、突然巡は抱きしめた。片手に持つた金魚の袋が小さく揺れる。

「私だつて真剣だよ…… 一年前からずっと真剣だもん」

頬の胸に巡は顔を埋める。

「あ、うん……」

頬は戸惑いながら、両手で巡を抱きしめた。柔らかく温かい巡の体。心臓がドキドキ高鳴る。

「離れてたつて、心は通じているから。手紙書くし、メールだつて電話だつて出来るし」

「そうだよな…… 一年なんて直ぐに過ぎるか……」

「私、頬にすごく感謝してる…… 今まで人を好きになつたことなんてなかつたの。誰かを好きになるつて、その人の事を考えるだけで勇気が沸いてくるものなんだね。私が強くなれたの頬のお陰だから、頬と出会つて良かつた……」

頬の胸に顔を押しあてて、頬を染めながら巡は語る。

「大好きだよ、頬……」

「俺も……」

巡の髪からほのかな甘い香りがする。このままずっと巡を放さないと思うほど、頬は巡のことを愛おしく思った。

「巡に出会えて良かつたつて思う。巡がいたから受験頑張れたんだ」

「頬が電車に乗り遅れてくれて良かつた」

巡はクスッと笑つた。

「そうだな、電車に感謝だ」

「ありがとう、頬……私、死ななくて良かつたよ」

巡は小さく呟くと、頬からそっと体を離し、頬を見つめる。初めて触れた唇の感触。肌の温もり。今、ここに生きているということを、巡は実感する。

「だろ?……」

頬は小さく笑う。初めての口づけの興奮で、頬の胸はまだ高鳴っていた。

「……この金魚、頬が育てて」

ふと、巡は金魚の入った袋を頬に差し出す。

「俺が?」

「イギリスまで持つてけないもん」

「ああ、そつか」

頬は金魚を受け取る。

「巡、だと思って大事に育ててやるよ」

「私が金魚つて訳?」

巡は不服そうな顔をする。

「そうさ」

「死なせたら許さないから」

「俺は金魚を育てるのも上手いんだぜ。一年後には数倍に増えてる

や」

「本当に?」

「ああ」

二人はお互いの顔を見つめて微笑み、手と手を繋ぐ。夜の涼しい風が吹き抜けていく。花火の終わった空は静けさを取り戻し、暗い夜空には花火の代わりに星達が瞬き始めた。

「一年後の夏祭りも、またここで花火を見よつた」

「うん、約束だよ」

「約束」

田と田を見合させ、指切りげんまんの代わりに、二人は軽く一度田のキスを交わす。イギリスだろうと日本だろうと、どんなに遠く離れた場所でも見上げる空は同じ空。

空は繋がっている。そんな当たり前のことだが、嬉しく思えてくる。二人の置かれた距離が遠ければ遠いほど、心は接近するような気がした。

通い合つ心と心。しつかりと繋がれた手と手。頬と頬は、急な石段をゆつぐりと下りていった。完

(後書き)

別の企画小説で書いた短編「depot 春野天使編」の続編です。
ちょうど季節が夏、続きを書いてみたかったので、すんなりと書く
ことが出来ました！

夏の風物詩をたくさん取り入れた、砂糖菓子のように甘い恋の話と
なりました。一人の成長、これからまた一年後が、楽しみになりました。
(^ ^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7510a/>

夏祭り～一年後の約束～

2010年10月8日15時12分発行